よく〳〵弟子云々　還するならば出家させて弟子にせよ。不適當ならば何にでも存意次第にしての意。
男になし　元服して大人の姿にする事。
御扶持あれ　祐成を助け救ひ給への意。
胸の煙も　敵の爲めに胸を焦したる其煩をもの意。
兄弟が其亡き跡と　これ兄弟の敵討ちたる遺跡ぞとて。後人に弔らはるゝ身に早くならんの意。

らぬ事にて候ふ。シテ「いやそれは女のはからひにて。筋なき事を申し候ふ。ワキ「いや大方殿御一人にても御座なく候ふ。父河津殿別當を召され。此子よくは弟子。惡しくは兎も角もと仰せ候ふ程に。扨こそ師弟の契約をなし申して候へ。祐成は御存じ有るまじく候ふ。シテ「御意尤にて候ふさりながら。我等が親の敵の事。心に隙なく思へども。敵は猛勢力なし。唯別當の御慈悲にて。箱王殿を男になし。父の恨みの敵をも。共に討たせて賜はらば。出家の功德に劣るまじ。唯祐成に御扶持あれと。地「かきくどきつゝ云ひければ。是非の言葉もあらばこそ。理なれや痛はしやと。別當も列座の人も。殊に袖をしをりけり。夢の世にながらへて。有るもかひなき身の行方。命ぞ限りなる。惜しまずながらへて。思ひはいつかは末遂げて。胸の煙も其名をも。富士の嶺に上げて。兄弟が其亡き跡と弔はれん。

愚僧　未熟の僧也。
とも〳〵　ともかくも愚意を察しての意。

ワキ詞「祐成にくどかれ申し。別當も落涙仕りて候ふ。此上は力及ばぬ事。別當は早領掌申し候ふさりながら。箱王殿の御心中を存ぜず候ふ程に。箱王殿を呼び出だし尋ね申さうずるにて候ふ。如何に誰かある。狂言「シカ〳〵。ワキ「箱王殿此方へと申し候へ。狂言「シカ〳〵。ワキ「いかに箱王殿。唯今祐成の御登山は餘の儀にあらず。箱王殿を男になし申し。本望を達したき由仰せられ候ふ間。愚僧は早領掌申して候ふが。扨御心にはいかゞ思し召され候ふぞ。箱王「ともかくも師匠の御はからひにてこそ候ふべけれさりながら。我等が親の敵の事。世に隱れなき事ぞかし。たとひ出家になりたりとも、忿るゝ隙はよもあらじ。とも〳〵御はからひ候へ。ワキ「扨は箱王殿も同じ御心にて候ふ。如何に祐成。御心を靜めて聞こし召され候へ。箱王殿生まれさせ給ひし時。故河津殿別當を召され。此子よくは弟子とも定め。

箱根の海山　心の深き譬。

猶成人を　箱王が早く大きくなれかしと祈りつるの意。　ともに蔭高き　祐成と箱王となり。

月の盃　月を盃に譬へ。また盃を月に譬ふ。此「暮方の月」の文字より次の「時刻も今は」の句を出だす。

悪しくはともかくも別當がはからひたるべしと仰せられし程に。権現の社官の別當なれば。箱根を象り御名をも。箱王殿とつけ申し。今元服のをりまでも。師弟の契約浅からず。同じくは出家をも遂げさせ申し。一寺を継がせ申したくは候へども。御身の心もさすがなり。祐成の御事も痛はるゝ。よし俗体になり給ふとも。内には慈悲の心中をなし。外には仁義を旨として。祐成の影身になり給へと。別當自ら酌を取り。地「行く末を。祈る師弟子や兄弟の。心は共に浅からぬ。深き箱根の海山の。たとへは同じ心にて。年々月日を迎へても。猶成人を急ぎつる。其かひ有りて今は早。ともに蔭高き。花の若枝ぞめでたき。かくて此日も暮方の。月の盃急げつゝ。

ロンギシテ「時刻も今は移るなり。暇申して歸らん。ワキ「花を吹く。嵐につるゝ梅が香を。留めてもいかに有明の。月盡きぬや名殘な

あらましの　敵を討たんとの意趣を云ふ。

曽我の里　伊豆の國加茂郡。

髪をはやして　元服する事。すなはち長き前髪を切る事。「切る」の文字を忌みて「はやす」と云へるなり。

此一宿り　其あたりの宿の一つある處を指す。

烏帽子を持ちて　元服すれば烏帽子を着るなり。

るかん。シテ「名殘もさぞなあらましの。末頼みある中なれば。ワキ「早又登山も有るべしや。シテ「さらばといひて兄弟は。地「さすがに別當も。門前を。シテ「出で行けば。年月馴れしなじみをば。いつか忘れん其跡を。見やれば伴ひ兄弟は。曽我の里にぞ歸りける。

箱王詞「如何に祐成に申すべき事の候ふ。シテ詞「何事にて候ふぞ。箱王「此まゝ髪を下げ故郷へ歸らば。母上又寺へ登れと仰せ候ふべし。是にて髪をはやして賜はり候へ。シテ「是は思ひもよらぬ事を申す物かな。いかに團三郎何と有るべきぞ。トモ「箱王殿の御諚の如く。御元服然るべう存じ候ふ。シテ「さあらば此一宿りへ來り候へ。如何に團三郎汝はやし候へ。トモ「是はかりそめながら御祝言にて候ふ程に。祐成御はやし候へ。シテ「さあらば烏帽子を持ちて來り候へ。トモ「畏つて候ふ。

輪廻の迷ひ　心の迷ひによりて大道と云ふ地獄。畜生などの六つの世界を。生きたり死ぬたりして常に魂のめぐりめぐる事。
因果　善因惡因により善果惡果を得る事。
きづな　束縛する綱の事。
宿縁　前世よりの縁。
子を思ふ道云々　後撰集に「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に迷ひぬるかな」とあるを引く。
雲井の鶴云々　白氏文集の。夜鶴憶子籠中鳴などより出でて。鶴は常に暗夜に子を思ひて迷ふ例に引く。

シテザシ「實にや我等程悲しき者よもあらじ。幼くして父を討たせ。其本望をも遂げずして。猶有りがひなき身となりぬ。よしよしそれも命を限り。終には恨みを晴るべきなり。唯元服こそうれしけれと。兄弟主從すごすごと。地「髪おしはやし千代までと。言葉ばかりは祝へども。そゞろにせきあへぬ。涙や袖をしをるらん。

地クリ「それ生死の道さまざまにして輪廻の迷ひ多し。因果を離れぬ絆も皆。親子兄弟の宿縁ぞかし。シテザシ「實にや人の親の迷ふ事。まことの闇にはあらねども。地「子を思ふ道にはたどると云へり。雲井の鶴は月影の。さやけき空と思へども。それも子をのみ思ひの闇に。聲をかはして鳴くとかや。シテ「我等は又親の跡に。地「殘りて物を思ひの露の。雨とも降り涙とも過ぎ。シテ「名をや埋まん苔の下。地「盡くるいつかは晴れん心の闇の。

龍門原上の云々　白氏文集に。龍門原上土。埋骨不埋名とあるを引く。龍門は建築の地名。
弓取　武士の事。
明經に　經書の教を守るの意。
電光朝露石の火　いづれも忽ちに見え忽ちに消ゆる譬。
初元結云々　源氏物語に「いときなき初元結に長き代を契る心は結びこめつや」と光源氏の君の元服を祝ひたる歌あれば。其意にて引けるなるべし。
能力　法師の下人。

は憂き世の習ひなる。ノセ「龍門原上の土に身はなるとも。屍の跡を思へたゞ。惜しみても惜しむべきは後名の嘲り。されば大國に千里を翔る虎は。一毛を惜しんで吹き來る風を含みて。其身をかへて死すとかや。日本の弓取は。其名を末代の家に惜しみ。一命輕ずるも。是れ皆明經に本文を思ふ心なり。身は一代名は末代。理や世の中は。電光朝露石の火の。あるれも有らぬ草の露。消ゆる境は夢なれや。シテ「今の我等が有樣を。地「思ふも憂き命の。惜しからぬ身なれども。本望を遂ぐるまでと。頼む便や兄弟主從。ともにすごすごと。髪をはやして祝言の。言の葉添ふる初元結。行方はめでたかるべしや。親孝行もかくばかり。さこそは草の陰に。我等を守り給ふらん。

ワキ詞「如何に能力。祐成に申すべき事の候ひしをはたと忘れてある間。追付き申さうずるにて有るぞ。汝は先へ行きて。何方

伊豆權現の 兄弟の生まれし土地の神なれバ云ふ。箱根權現の神力の上に之を添ふるの意。

咲く頃の云々 酒宴の興に歌ふ歌。元服を祝ふ心なり。

まで御出で候ふぞ留め申し候へ。狂言「シカ〳〵。トモ詞「如何に申し候ふ。別當の是まで御出でにて候ふ。シテ詞「何別當の是まで御出でと申すか。此方へ御入りあれと申し候へ。トモ「畏つて候ふ。此方へ御入り候へ。シテ「扨是までは何の爲めに御出で候ふぞ。ワキ「さん候ふ是まで參る事餘の儀にあらず。箱王殿の御髪を。愚僧はやし申さん爲めに參りて候ふ。シテ「さん候ふ箱王元服したき由申し候ふ程に。是にて元服させて候ふ。ワキ「何と元服と候ふや。いで〳〵元服祝はんと。別當に傳はる重代の太刀。伊豆權現の力を添へ。思ふ本望遂げ給へと。箱王殿に奉り。地「やがて祝ひの御酒一つ。すゝめ申せや人々と。同じく共に圓居し。酒宴をこそハ始めけれ。シテ「咲く頃の。梢時めく折に來て。地「烏帽子櫻の花を見ん。ワキ詞「如何に祐成。めでたき折りなれば一指御舞ひ候へ。地「烏帽子櫻の花を見ん。シテ「菊の名の。曾我の昔の秋の暮。地「萬代祝ふ心こそあれ。シテ「心言葉は人の情。地「徒に。朽ちぬる身は惜しむべし。名は殘り有る代の跡の世語り。夢ならば覺めなん。現とも白眞弓。引きは返さじ富士の高嶺に。かならず名を上げて。跡の世語りと思し召さるべし。是こそ名殘の酒宴の戯むれ。師弟の情ぞ有り難き。

ゑぼしざくら 櫻の名。元服の意にかけたり。

菊の名の云々 當時云ひつたへたる古歌なるべし。

合浦 かつぽ

作者未詳

前シテ 童子
後シテ 鮫人
ワキ 里人
間 所土

合浦の玉と鮫人の玉との古事を取り合はせて作れるなり。蒙求に「後漢の孟嘗合浦の太守に遷る。郡穀實を産せずして海珠寶を出だす。交趾と境を比べ常に商販を通じ糧食を貿糴す。先時の宰守ならびに多く貪穢にして人を責めて採り求め紀極を知らず。珠やうやく交趾の郡堺にうつり。行旅至らず人物資なく貧者ハ道に餓死す。孟嘗に到りてより前弊を革め易へ。民の病へ(苦)利(益)を求めしかバ。未だ歳を踰えずして去りし珠また還り。百姓皆業に反り商貨流通す。稱して神明と爲す」と見

ワキ詞「是ハ唐土合浦と申す所に住居する者にて候ふ。今日は日もうらゝに候ふ程に。浦に出で釣するを詠めばやと存じ候ふ。シテ一聲「わたづみの。底ろこともいさや白波の。龍の都を出づるなり。詞「いかに此屋の内に主やまします。一夜の宿をかし給へ。ワキ詞「日もはや暮れてとざしつるに。宿とは誰にてましま

ね。呉都賦に。「俗に傳ふ。鮫人水中より出で。曾て人家に寄寓して積日絹を賣る。鮫人去るに臨みて主人に器をもとめ。泣いて珠を出だして盤を滿たす」と見えたり。
わたづみの　海の事。
そこともいさや　龍宮はそこならんと知られぬの意。
たゝく水鶏　水鶏の鳴聲は戸をたゝくやうに聞ゆれば云ふ。こゝは誠に戸をたゝく事を知りて水鶏に比したり。
そとも　外面に立つや久方の　戸の明くまで外に立ちて待つが久しきの意。
埴生の小屋　賤しき家を云ふ。
床さへぬれば　寐床の事く覺ゆるを云ふ。
我妹子が云々　催馬樂に「妹が門や背な門。行き過ぎかねて我行かば。ひぢ笠の雨もや降らなんしでたをさ。雨やどり笠やどりてまからんしでたをさ」とあるを用ふ。我妹子は我が思ふ女を云ふ。ひぢ笠は肱をまげて笠の代りにすると云ふ意。又ひさかたの雨の數音なりとも云へり。
此世ならぬ契　現世ばかりの緣にあらずの意。
うろくづ　魚を云ふ。こゝにては鮫人を指す。
なども命恩　命を救はれし恩をどとて忘れはせずの意。人家に長く寄せしを云ふ。
ひれふして　魚の鰭を伏する事を禮拜する意にかけて云ふ。

すぞ。シテ「よし誰なりとも其情に。一村雨の雨宿り。一夜の宿をかし給へ。ワキ「たゝく水鶏の外面に立つや久方の。埴生の小屋に小雨ふる。シテ「床さへぬれば。ワキ「我妹子が。地「ひぢ笠の。雨は降り來ぬ雨宿りの。賴む木陰かや。一樹の陰のやどりも。此世ならぬ契なり。一河の流れを汲みて知る。合浦の浦の江のほとり。鱗もなどや命恩の。其情をば知らざらん。

ワキ詞「何と見申せども更に人間とは見え給はず候ふ。名を御なのり候へ。シテ「今は何をかつゝむべき。我は鮫人といへる魚の精なり。命をつがれまゐらせし。報謝の爲めに來りたり。我泣く涙の露の玉。絕えぬ寶となるべきなり。地「鮫人涙に玉をなして。命恩を寶珠をなほも捧げて。合浦にも入らせ給へと。前なる諸の波の上に。入るよと見えつるが。白魚となつて其まゝに。ひれふして失せにけり。あとひれふして失せにけり。

龍女は云々　八才の龍女は。寶珠を釋尊に奉りて成佛せし事法華經にあり。
變成就　其功徳によりて女子の身が男子に變成する事。
奈落　地獄の事。
うたかた　水の泡の事。
眞如の玉の緒の　眞如の心の明らかなるを玉に譬へ。それを玉の緒につゞけたり。玉の緒は命の事。
當來　未來の世を云ふ。
玉はふたゝび　かの孟嘗の古事。

後シテ「龍女は如意の寶珠を釋尊に捧げ。變成就の法をなし。地「奈落や奈落の底の白魚なれども。など命恩を報ぜざらんと。波立ちさわぎ汐うづまいて。うたかたの上にぞ顯はれたる。シテ「是こそ眞如の玉の緒の。地「是こそ眞如の玉の緒の。壽命長遠息災延命の寶の玉は。當來までの二世の願ひも成就なるべし。是までなりや。織りつる綾の浦は合浦。玉はふたゝび歸る波の千秋萬歲の寶の玉は。合浦の浦にぞをさまりける。

明治廿五年七月四日印刷
明治廿五年七月五日出版

正價金二拾五錢

版權登錄

謡曲通解 第五巻
版權所有

編輯者 大和田建樹
牛込區東榎町二十番地

發行者兼印刷者 大橋新太郎
日本橋區本石町三丁目十六番地

發兌元 東京日本橋區本石町三丁目 博文館

16
3
79

文科大學敎授文學士高津鍬三郎先生校閲、
文科大學生下野遠光 山﨑庚午郎兩君編述

日本文學集覽

(製本既成)

全一冊紙數七百頁
總クロス洋裝美本
正價金五拾錢
郵便稅拾錢

本邦文學の趣味漸く吾國人民の知るところとなりたれども、尚ほ未だ不滿足の感なき能はず、本舘先に文學、歌學の兩全書、及德川時代の文學書類を刊行して、大に讀者諸君の喝采を給はり、冊毎に三四版に至らさるものなかりき、此書も亦本邦文學の由來及碩學の名論卓說を論述したるものにて、和文史、和歌史、國史及び法制等を詳述し、特に篇毎に教草といふものを設けて、學者の參考となるべきものを掲載せり、其文体や明晰、其筆力や流暢、殊に日本文學史、文典等を著して有名なる高津文學士の助筆になれるものなれば、その一大好書たる推して知るべし、洛陽の紙價爲に貴きを得ば幸甚

野村傳四郎君編
福羽美靜先生

硯海の一句

全一冊大判
洋裝美本
正價拾二錢
郵稅四錢

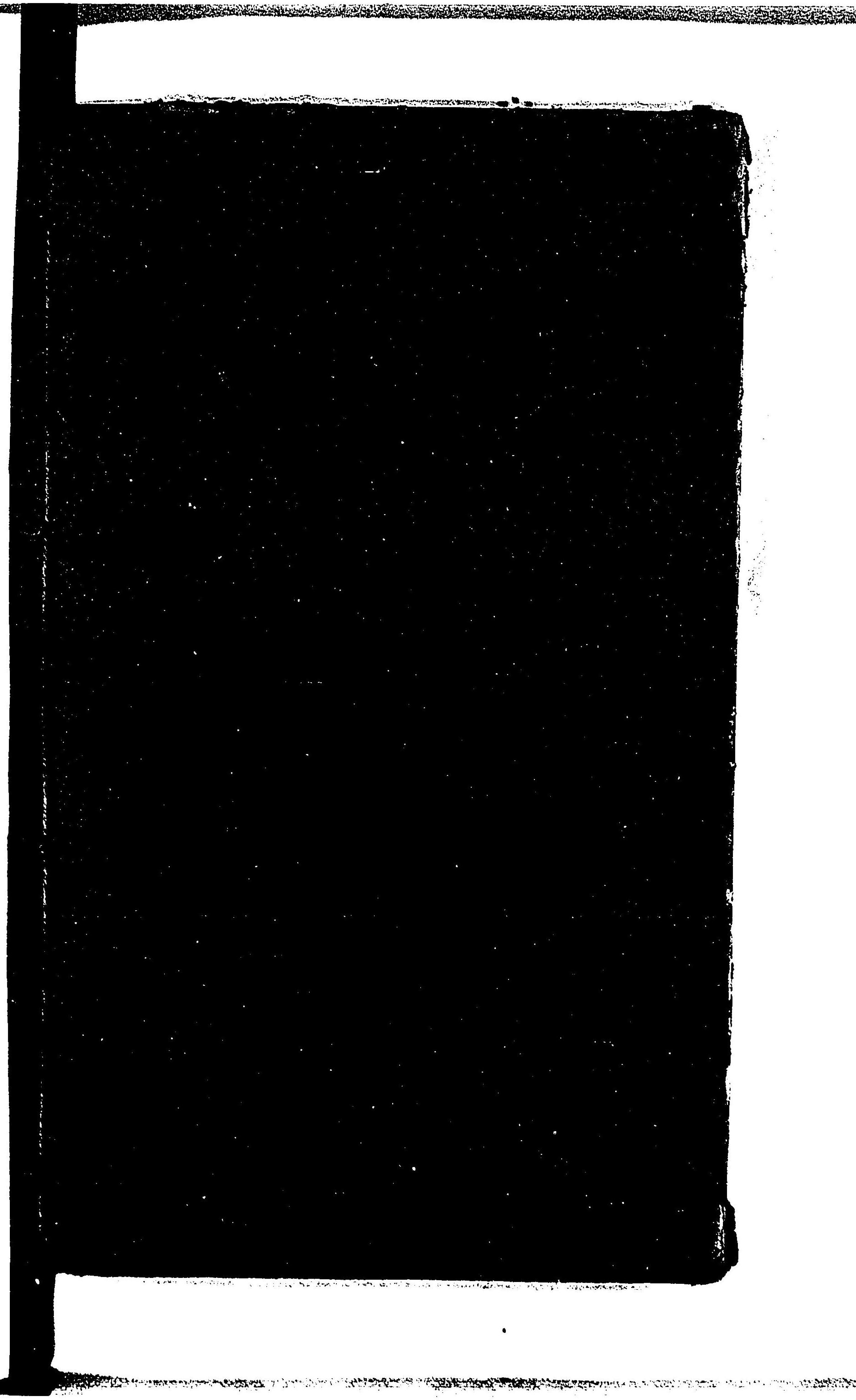
目次 ●題群盲探象鬪●手鞠歌●かぞへうた●童子訓●むさし野みやげ●女德●年中行事歌●詠人道歌并短歌●日本歷史歌●古典歌●桃太郎誦歌●奉祝立皇太子古調今調二首歌●祝言●笏の記●あるときの作●ある所の園遊會にてしるしける詞●入のしるべ●鶯花文談の中●出世のあらまし●人の道早わかり

山田美妙君書

日本室內粧飾法

全一冊大判
洋裝美本
正價拾五錢
郵稅六錢

目次 ●總論‖配合の二要素‖色と形●色の配合○好く合ふ色◎總論‖花の生け方●花の各流○天地人眞行草の枝くばり○本逆兩勝手○眞行草三種の姿●葉、花及び色の陰陽○去り嫌ひ七ヶ條○花体の高さ○花器の長の鑒定○花器の種類○花臺○花器と花臺の取合せ○花と花器の取合せ●季の物の類別●花くばり●花の拵へ方●燕子花と花菖蒲●牡丹○藤○朝顔



[illegible]曲通解　五

10
79